

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：31203

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20038

研究課題名（和文）「説得」をめぐるパスカルの思想と方法の総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Pascal's Thought and Method on 'Persuasion'

研究代表者

鈴木 真太郎（SUZUKI, Shintaro）

盛岡大学・文学部・准教授

研究者番号：40962452

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、17世紀フランスを代表する数学者・物理学者・キリスト教思想家として知られるパスカルの説得術を、文体・修辞・論理構成という3つの観点から考察し、その特質の解明を目指した。初年度は、パスカルの代表作として知られる2つの作品（『プロヴァンシアル書簡』（1656-57）と『パンセ』（1662））を材として分析を進め、両作品の論証スタイルの共通点・相違点を析出し、最終年度は前時代の思想家モンテーニュおよび同時代の護教家ボシュエの論証スタイルとパスカルのそれの比較を試み、パスカルの説得術の特質（例：メタ性）を導出した。成果については国内外の学会・研究会で報告したほか、一部を論文にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

思想と言葉は不可分である以上、ある思想を繙くには、その思想がいかなる言葉で構成されているのかを解明する必要がある。未完の「キリスト教護教論」として知られる『パンセ』で展開されるパスカルの思想を理解する上で、同著者の他の作品の言語的特質を分析することは、方法的に有効であると思われる。本研究は、こうした認識に立ち、個別に検討が加えられることが多かった『プロヴァンシアル書簡』と『パンセ』を横断的に考察し、両作品の論証スタイルの共通点・相違点（の一端）を導出した。さらに、モンテーニュやボシュエといった前時代・同時代の思想家・護教家の論証スタイルと比較することで、パスカルの説得術の特質を指摘した。

研究成果の概要（英文）：This study examined the art of persuasion of Pascal, known as a mathematician, physicist, and christian philosopher representing 17th century of France, from the three perspectives (style, rhetoric, and logical structure), with the aim of elucidating its characteristics. In the first year, I (we) carefully scrutinized two of Pascal's best-known works, The "Provincial Letters" (1656-57) and The "Thoughts" (1662), to analyze the similarities and differences in their styles of argumentation, and in the final year, I (we) attempted to compare Pascal's style of argumentation with that of Montaigne, a philosopher of the previous era, and with that of Bossuet, a contemporary apologist, and derived some of characteristics of Pascal's art of persuasion (e. g., meta-ness). The results were reported at domestic/international conferences and at research meetings, and some of them were summarized in papers.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：メタレベルの説得 演劇的論証 イロニーの精神 『パンセ』の受容と展開 「賭け」の議論 死の自覚的生と人間の尊厳 レトリック

1. 研究開始当初の背景

17世紀フランスを代表する数学者・物理学者・思想家として知られるブレーズ・パスカル(1623-1662)は晩年、キリスト教真理に懐疑的な態度を示す不信仰者を仮想的読者とする「キリスト教護教論」を構想していた。未完に終わったこの企画の下書きをもとに、著者の死後、近親者によって出版されたのが『パンセ』(初版1670)である。『パンセ』(あるいは未完の「護教論」)は、相互に異質な諸断章の集成であると同時に、自然科学、近代科学、宗教実践における理性の役割、政教分離問題など、多岐に渡るパスカルの思想の結節物でもある。『パンセ』研究は近年著しく発展しており、3つの新たな方向性が示されている(1:草稿資料に基づく『パンセ』の総合的再検討(例:ロラン・シュジエ『パスカルのエクリチュール』、2008)、2:パスカルの思想と同時代のキリスト教思想の比較(例:ジェラルド・フェレル『パスカルからボシユエへ 神学と人間学のあいだの文学』、2020)、3:ポール・ロワイヤルおよびジャンセニスム運動の歴史・思想研究(例:ケイスケ・ミノ『ジャンセニスム反駁』、2012)である)。2017年以降、報告者は上記の方向性を念頭に置きながら、パスカルの思想と表現形式の関係について一貫して考察を重ねてきた。その過程で、次の2つの問いが導出された。(1)『プロヴァンシアル書簡』(『書簡』)(1656-57)は『パンセ』と同時期に執筆され、後世のフランス文学作品の文体に長期的かつ多大な影響を与えた、一般大衆の説得を目的とする18通の論争書簡であるが、両作品は個別に検討が加えられる傾向にある。表現形式という観点から両作品を横断的・系譜的に読み直すことで、未完の「護教論」の新たな特質が見出されるのではないかと、(2)前時代の思想家モンテーニュや同時代の護教家ボシユエとパスカルを比較する場合、思想が注目されがちであるが、修辞技巧や表現形式という観点から比較することで、パスカルの思想と方法の新局面が見えてくるのではないかと。

2. 研究の目的

上記の問いに基づく本研究の主たる目的は次の2つである。(1)表現形式の比較を通じて『書簡』から『パンセ』に至るパスカルの思考の軌跡を辿ることによって、両作品の思想的・方法的な共通点・相違点を解明すること、(2)前時代のモンテーニュとの比較のなかでパスカルの思想・表現形式の特徴を析出し、その独自性を同時代のキリスト教文学(とりわけボシユエ)のなかで相対的に評価し直すこと。

3. 研究の方法

上記の方針に基づき、報告者は研究助成期間中、下記の研究に取り組んだ。

(1)『書簡』から『パンセ』に至るパスカルの思想と表現形式の文献学的研究

これまで、未完の「護教論」の目次(らしきもの)に記された1-27の章に含まれる断章群が示すパスカルの思想と表現形式について考察を進めてきた。本研究では、草稿資料や1-27の章群に含まれない諸断章はもとより、周辺資料や近親知己の評言も考察の対象に加えることで、『パンセ』におけるパスカルの思想を、より俯瞰的・体系的に考察した。その際特に、思想面・技法面における『書簡』と『パンセ』の(非)連続性と、パスカルが表現形式のレヴェルで宗教と理性をどう区別していたのかという点に着目した。

(2)モンテーニュおよびボシユエの「方法」との比較研究

本研究は、単なる技法研究に終始するのではなく、表現形式が論述全体の説得力にいかなる影響を与えているか、という問いにまで踏み込んで、パスカルの思想と方法を考察した。そのために、『パンセ』で用いられる表現形式を網羅的に検討することに加え、『パンセ』に先行する作品(モンテーニュ『エッセ』(初版1580))と、同時代の護教家の作品(ボシユエ『死についての説教』(1662))との比較考察を試みた。

4. 研究成果

本研究の成果は下記の通りである。

(1)パスカルの〈説得〉におけるイロニーの精神

研究開始当初の背景にて記した通り、『書簡』と『パンセ』はメッセージの受信対象こそ違えども、説得的な性格を有するという点では共通している。両作品で用いられている修辞的技法は数多くあるが、本研究ではとりわけイロニー(ironie)という技巧に着目した。イロニーは、それが機知に富んでいるときには、読者に笑いを誘い、心を温めるという効果を持つだけでなく、認識を変えようという点で精神に働きかける。イロニーは多様であり、理解しやすいものもあれば、難解なものもある。『パンセ』にはどちらも含まれている。後者の性質を持つイロニーに着目することで、パスカルがいかなる精神を持つ相手に、いかなるメッセージを、いかに届けようとしたのかを理解できるのではないかと。報告者はこうした認識に立ち、説得の手段としてのイロニーと、それを支える精神について考察を試みた。第一に、アリストテレスやクインティリアヌスに代表される古典弁論術の一つとしてのイロニーの理論的側面を、第二に『書簡』におけるイロニーの実践を、最後に『パンセ』におけるイロニーの実践を、それぞれ考察した。その結果、『書

簡』と『パンセ』のあいだに、いくつかの共通点・相違点を認めるに至った。たとえば『書簡』のイロニーの用法はソクラテス的であるのに対し、『パンセ』のそれは、比喩性、思考の文彩、寓意性を伴い、イロニーに込められた意図を理解することは容易ではない。だが、『パンセ』に認められるイロニーの難しさは、実のところ、読者を神の探求へ誘うための仕掛けなのである。イロニーが発するメッセージの理解が難しいからこそ、逆に、その意味を理解するための精読、つまりは「探求」という行為が、読者には要請される。『パンセ』におけるイロニーは、メタレベルで読者の認識に働きかけ、神の探求へ向かう主体性を読者のうちに育む。こうした説得の実践には、説得を試みながらも、読者はパスカルの説得に簡単に説得されてはならないというある種の逆説性を読み取ることができるかもしれない。この点について、また、パスカルのイロニーの技法が、修辞学・論理学の伝統や同時代のキリスト教文学のなかでどう位置付けられるのかという点については、今後引き続き検討を加えていく。

上記の研究成果は、その一部を、2023年2月に開かれた第9回フランス近世の〈知脈〉研究会（於大阪大学）にて口頭発表した（題目：「パスカルの論述における「笑い」あるいは「嘲笑」——『プロヴァンシアル書簡』から『パンセ』へ——」）ほか、論文にまとめた（鈴木真太郎「パスカルの〈説得〉におけるイロニーの精神——『プロヴァンシアル書簡』から『パンセ』へ——」、『西洋文学研究』（大谷大学西洋文学研究会）、第43号、1-42頁、2023年8月）。

(2) 日本におけるパスカル『パンセ』の受容

パスカル生誕400周年を記念する大規模な国際研究集会がパリで開かれることになり、フランス側の研究者より、日本における『パンセ』の受容について発表を打診された。受容の研究は当初の計画にはなかったが、『パンセ』が日本で広く受容されてきたのは、パスカルの言葉が普遍的な魅力を有するからではないか。この問いに答えるには、思想と表現形式の関係も必然的に検討されなければならないのだから、受容の問題を研究することは本研究を補完することはあっても矛盾するものではない。このように考えた報告者は、日本で初めてパスカルを本格的に論じたとされる哲学者三木清が、その思想をいかに受容し、三木の処女作『パスカルにおける人間の研究』（初版1926）においていかに展開していったのかを考察することにした。パスカルの「賭け」の議論とその表現形式を考察の中心に置き、第一に三木の生涯と「賭け」の断章の係り性を、第二に三木の「賭け」の解釈に影響を与えた哲学者ジュール・ラシュリエの考えを、最後に「賭け」の議論についての三木の考えを、それぞれ考察した。その結果、三木は「パスカルの主張する「神ありへの賭け」は人々の不安を希望に変える可能性を持つ」とのラシュリエの指摘を踏まえた上で、不安の原因は何か、その不安を希望に変えることができるとすればそれはなぜかという問いにまで踏み込んでいる、との考察に至った。不安の原因は死の自覚にほかならないが、死と向き合うという過程において、人間は真に自己と向き合うことが可能になる。そのために理性を用いることに人間の尊厳がある。三木は、パスカル研究に関する文献が少なかった時代を生きたにもかかわらず、パスカルの思想の本質と表現の特性を見事に捉えていたのである。

上記の研究成果は、その一部を2023年6月15から17日にかけてパリ、新ソルボンヌ大学で開かれた国際研究集会「各時代のブレイズ・パスカル：2023-1623」において口頭発表し（題目：「パスカル『パンセ』の日本における受容——「賭け」の議論を読む三木清——」）、会場で得られた批判を踏まえて発表原稿に修正を加えた論文を、記念論集に投稿した。近日刊行予定である。

(3) 死を見つめて生きること、あるいは人間の尊厳

(2)の研究過程で、パスカルの思想とその表現形式は、死と生に関する論述において際立っているとの考察に至った。生きとし生けるものすべてに死は訪れる。しかし多くの場合、人は死について考えない。死は一つの現実であるが、人は死ぬときまで死を経験できないため、恐怖心を生む。人は死を恐れ、そこから目を背ける。パスカルは逆に、死という現実から目を背けることのほうが恐ろしい、との考えを提示する。なぜパスカルはこのような考えるのか。この問題意識から出発し、報告者は前時代・同時代の思想家・護教家の死に対する考えとパスカルのそれとの比較を試みた。第一にモンテーニュとボシュエの死に関する思想を、第二に死に対するパスカルの認識を知るための重要なテキスト「父の死についての手紙」を、最後に未完の「護教論」において死がどのように説かれているのかという問題を、それぞれ考察した。その結果、次の結論が導かれた。すなわち、①パスカルはモンテーニュから思想的影響を受けながらも、死の対処法については真っ向から批判している。どうしても死と向き合わなくてはならないからである。ボシュエはこのことを、キリスト教を基盤として説く。相手がキリスト教徒である場合は、パスカルの説き方もボシュエと同様である。しかし未完の『護教論』においてはそうではない。説得対象として不信仰者を想定しているため、パスカルは理性の次元での説得に留める。パスカルの思想の画期的な点はおそらく、何事も宗教を軸に考えることが主流だった時代に、宗教的言説を持ち出さずに説得を試みた点にある。パスカルは死と向き合うことの必要性を、不信仰者でもわかる形で提示しており、それを基盤として、彼らをキリスト教信仰へ向かわせようとしている。②未完の「護教論」に見られるパスカルの人間観は、悲観的であるとの非りをしばしば受けてきたが、必ずしもそうとは言えない。パスカルは、死と向き合わずに生きるほうが、死と向き合う生よりも不幸であると説く。死と向き合うことは、醜悪な面も含めて真の自己を発見するための方

法でもある。この営みに人間の尊厳がある。このように見るならば、人間の本質を真正面から捉え、人間の尊厳を取り戻すことを促しているだけなのであって、少なくとも死という観点から見れば、パスカルの思想が悲観的とは言い得ない。

レトリックの観点からすれば、パスカルの死に関する考え方は、その内容のみならず、彼の「説得術」でもって読者に訴えるものである。上記の考察について言えば、主語の設定の仕方や類比思考、比喻のような説得術が、読者を死に向き直させ、生へと促す。今後はたとえばパスカルの科学論文におけるレトリックと宗教に関する言説との関わりに焦点を当てて彼の説得方法について解明し、思想と文学双方の観点から評価することが課題である。

上記の研究成果は、その一部を、2023年9月にパスカル生誕400周年を記念して開かれたシンポジウム（「パスカルとポール・ロワイヤル」（パスカル研究会・日仏哲学会共催、於大阪大学））で口頭発表し（題目：「パスカルにおける「死」の認識と「生」の希望）、会場で得られた批判を踏まえて発表原稿に修正を加え、論文にまとめた（鈴木真太郎「死を見つめて生きること、あるいは人間の尊厳 —パスカルの『護教論』、モンテーニュ、ボッシュエをめぐって—」、『フランス文学研究』（東北大学フランス語フランス文学会）、第44号、24-35頁、2024年3月）。

(4) その他

上記に加え、日本におけるパスカル『パンセ』の受容史についてミラノ大学教授で哲学史の専門家であるアルベルト・フリゴ氏の学部生を対象とする授業内で講演したほか（2023年3月）、モンテーニュの思想についてフィレンツェ大学教授でフランス文学の専門家であるミケラ・ランディ氏の授業内で講演するなど（2024年2月）、意識的に、フランス以外の国での研究発表・学術交流にも挑戦し、研究の幅を広げた。パスカルがイタリアでどう評価されてきたかについて有益な議論を交わすこともできた。

『プロヴァンシアル書簡』の研究成果については、岡山大学准教授の野呂康氏が主催する日仏オンライン研究会でも発表している（2024年1月）。この発表原稿に修正を加え、さらに発展させたものを、2024年9月に岡山大学で開かれる国際研究集会（2024年）で発表予定である。

今後は、(1)～(4)の研究過程で浮かび上がった各課題を継続して研究しつつ、新たに、科学と宗教の邂逅という観点から、パスカルにおける説得術を考察する。隣接する諸分野も視野に収め、より多角的で、開かれた研究の実践を目指す。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 鈴木真太郎	4. 巻 43
2. 論文標題 パスカルの 説得 におけるイロニーの精神 『プロヴァンシアル書簡』から『パンセ』へ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 西洋文学研究（大谷大学西洋文学研究会）	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木真太郎	4. 巻 44
2. 論文標題 死を見つめて生きること、あるいは人間の尊厳 パスカルの『護教論』、モンテーニュ、ボシュエをめぐって	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 フランス文学研究（東北大学フランス語フランス文学会）	6. 最初と最後の頁 24-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 4件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 鈴木真太郎
2. 発表標題 先行研究の批判的考察：《《 Rire des erreurs des hommes 》：Les Provinciales, une comedie ? 》d'Anne Regent-Susini
3. 学会等名 Projet Pascal Les Provinciales 2024 (PPP 2024) 第3回会合（主催：岡山大学 野呂康准教授）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木真太郎
2. 発表標題 パスカルの論述における「笑い」あるいは「嘲笑」 『プロヴァンシアル書簡』から『パンセ』へ
3. 学会等名 フランス近世の 知脈 第9回研究会（主催：大阪大学 山上浩嗣教授）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shintaro SUZUKI
2. 発表標題 La reception des Pensees de Pascal au Japon MIKI Kiyoshi lecteur du 《 pari 》 de Pascal
3. 学会等名 Blaise Pascal en ses epoques : 2023-1623 (Colloque du CEIPREM, Sorbonne nouvelle) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木真太郎
2. 発表標題 パスカルにおける「死」の認識と「生」の希望
3. 学会等名 パスカルとポール・ロワイヤル(パスカル研究会・日仏哲学会共催)(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shintaro SUZUKI
2. 発表標題 Rhetorique et vraisemblance dans Les Provinciales : autour de la Ire Lettre
3. 学会等名 Projet Pascal Provinciales 2024 (PPP 2024) 第11回会合(招待講演)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------